

機関番号：17401  
 研究種目：基盤研究(C)  
 研究期間：2008～2010  
 課題番号：20520022  
 研究課題名（和文） 人間の不合理性の起源

研究課題名（英文） Origins of Human Irrationality

研究代表者  
 岡部 勉 (OKABE TSUTOMU)  
 熊本大学・文学部・教授  
 研究者番号：50117339

研究成果の概要（和文）：現代の行為論を主導するドナルド・デイヴィッドソンの考え方に対してあからさまに批判的なポール・グライスによる「行為と出来事の違いをめぐる議論」の意義を明らかにした。また、グライスが主張する「合理性と規範性に関する反自然主義的な構成主義と価値に関する実在論の両立可能性」をめぐる、その論拠を探るとともに、合理性と規範性に反する「意志の弱さ」を含む人間の不合理性の起源について、構成主義の立場からどのように説明できるかを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The meaning of the arguments by Paul Grice about the distinction between actions and events was clarified, who was plainly critical of the ideas of Donald Davidson, the leading ideas of modern action theories. And, while the grounds for the coexisting possibility of the anti-naturalistic constructivism concerning rationality and normativeness and the realism concerning value, on which Grice insisted, were investigated properly, how to explain the origins of human irrationality, including weakness of the will, as against rationality and normativeness were clarified from the viewpoint of constructivism.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：哲学

科研費の分科・細目：哲学・哲学・倫理学

キーワード：不合理・行為・価値・目的・アリストテレス・グライス・構成主義・反自然主義

#### 1. 研究開始当初の背景

(1) 国内における合理性と規範性に関する研究は、これまでに、アリストテレス研究者あるいはカント研究者を中心として、それなりに蓄積されてきたと言える。行為論的視点を基本とする、ある種「総合的」な研究の試みもかつてなされたことがあり、研究代表者は、そのような研究（平成9～10年度科学研究

費補助金による研究「行為の文法の成立—因果的世界における合理性と規範性」）に、研究分担者として関わりを持ったことがある。また、研究代表者は、平成13年度～15年度科学研究費補助金による研究「価値をめぐる真理と存在に関する実在論的考察の可能性と限界」及び拙論「実践的推論とアクラシア—基礎的合理性と自然言語に関する一研究」（『文

学部論叢』84, 2005, 97-129)において、また、拙著『合理的とはどういうことか』（講談社、2007）において、本研究の準備的な作業を完了させていた。本研究は、以上のような過去の経緯と蓄積を踏まえて、人間の不合理性を、行為論、価値論、そして理性論の視点から「総合的」に論じる研究として成果を挙げることを目指すものである。

(2) 国外においては、不合理性の研究に関する、文字通り「総合的」な取り組みというのは、見当たらない。少し前のものとして、David Pears, *Motivated Irrationality*, Oxford University Press, 1984 があるが、視野は限られている。最近のものとしては、Donald Davidson の合理性研究 (*Problems of Rationality*, Oxford University Press, 2004) があるが、これも、不合理性を、基本的には論理的不整合の問題と見ようとしており、余りに視野が限定されている。他方で、人間の不合理性に焦点を当てたものではないが、合理性と規範性に関する研究は、世界的に見ると、このところ、ある種流行のようになっていて、蓄積された研究資料は、かなり膨大なものとなっており、整理にはかなりの労力が必要な状況である。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、人間の不合理性は、そもそもどのようなものであって、どこからくるものなのか、何に由来するものなのかを、根本的に明らかにしようとすることにある。

人間の不合理性とは、推論能力とか社会性と計画性の能力というような、基本的な能力の欠如という問題なのか、それとも、社会規範とか常識といったものからの逸脱という問題なのか、あるいは、感情とか欲求に対するある種の無抑制という問題なのか、これらの問いに対して明快な解答が得られるようにすることを目指す。

本研究は、人間の不合理性・愚かさ・弱さについて、広く感情と欲求、目的と価値、合理性と規範性という基本的な問題と関連させて、行為論、価値論、そして理性論の視点から「総合的」に論じようとするものである。

(2) 人間の不合理性とは人間に対する合理性と規範性の要求に反するものだとしたら、そもそもそのような要求というのはどこからくるのか、そして、なぜそのような要求に反するということが人間にはあり得るのか。以上のような問いに対して、単純な仕方で、自然主義的な立場から解答することはできないと思われる。

今日隆盛を見ると言える自然主義的な立場をとる研究者と、Hilary Putnam をはじめとする、反自然主義的な立場をとる研究者の間

の議論を整理しつつ、反自然主義的な考え方の積極的な意義と今後の展開可能性を明らかにする。その際、感情と欲求をどのように位置付けるか、また、目的と価値の生成、合理性と規範性の起源をどのように説明するかという困難な問題について、詳細に論じる必要がある。

(3) 合理性の能力そのものは、本来、自然発生的なものである。では、実践的推論に対する合理性と規範性の要求も、何らか自然発生的なものであると考えるべきか。今日、多くの論者が、それを何らか自然的なものとする、自然主義的な説明を与えようとしているように思われる。本研究は、そうした自然主義的な説明の可能性を、はじめから否定しようとするものではないが、基本的には Paul Grice, *Aspects of Reason*, Oxford University Press, 2001 の示唆に従って、全く別の可能性を探ろうとするものである。

Paul Grice については、最近出版された、Siobhan Chapman によるすぐれた評伝、*Paul Grice: Philosopher and Linguist*, Palgrave Macmillan, 2005 をはじめとして、徐々に研究成果が公表されつつあるが、本邦ではまだよく知られていない。

Grice の考え方は、はっきりと反自然主義的、構成主義的立場に立つものであると言えるように思われるが、価値に関しては、反実在論的な立場に立つとは言えないように思われる。しかし、合理性と規範性に関して反自然主義的構成主義の考え方をする場合に、価値に関する実在論はどのようにして可能になるのか。

(4) 本研究は、アクラシア（意志の弱さ）を含む人間の不合理性・愚かさ・弱さについて、感情と欲求、目的と価値、合理性と規範性という、人間をめぐる基本的な問題との関連においてその詳細を明らかにしながら、哲学だけでなく、社会学や精神医学的視点に立つ研究者からも広く受け入れられるような説明を与えることを目指すものである。

## 3. 研究の方法

(1) 本研究は、上で述べたように、基本的な戦略としては、Paul Grice, *Aspects of Reason*, 2001 の示唆に従って、人間の不合理性・愚かさ・弱さについて、広く感情と欲求、目的と価値、合理性と規範性という基本的な問題と関連させて、行為論、価値論、そして理性論の視点から「総合的」に論じようとするものである。

①そのためには、第一に、Grice の考え方について十分な理解を得る必要がある。Grice の行為論、価値論、そして理性論は、明白に、

反自然主義的、構成主義的な形而上学的議論を基礎とするものであると言える。しかも、価値に関して反実在論的であるとは言えないと思われる。合理性と規範性に関する反自然主義的構成主義が、価値に関する実在論を如何にして可能にするのか、この点を明確にする必要がある。

②第二には、この十数年の間に欧米を中心として積み重ねられてきた、合理性と規範性をめぐる膨大な議論の整理をする必要がある。その多くは、自然主義的な主張との融合を何らか模索しようとする、Grice 的な考え方は正反対のベクトルを持つ議論である。しかし、かえって、Antonio Damasio のような脳神経学者の議論に、感情とか価値の問題を含む、合理性と規範性に関する議論の、Grice 的な方向における、革新的で総合的と言える展開の可能性を見出すことができるように思われる。

③第三には、合理性と規範性に反するとされるアクラシア（意志の弱さ）という現象が、構成主義的な立場からはどのように説明されるのか、この点について明快な理解を得る必要がある。

本研究は、最終的には、人間の不合理性の起源を明らかにするとともに、アクラシアという極めて人間的な現象について、何らか明快で説得力のある説明を与えることを目指すものである。

(2) 研究代表者はこれまで、7年余りにわたって、熊本学園大学の長友敬一准教授等とともに、Grice のテキストの読解を中心とする研究会を継続して開催してきた。研究会の基本テキストとしている、死後に出版された二つの講義録 (*The Conception of Value*, 1991; *Aspects of Reason*, 2001) は、世界的に非常に高い評価が与えられているものであるが、極めて高度な内容を持つ難解な著作であり、安易な接近を拒むものである。

Grice の議論は、アリストテレスの形而上学とカントの超越論的議論を踏まえた、哲学的に極めて正統なものである。それに加えて、現代的な言語哲学の第一人者である Grice の議論を理解するには、現代の意味論と真理論に精通することが求められる。

①上記研究会の継続は、アリストテレスの形而上学から現代の意味論と真理論までを包含する広大な領域を、議論の対象領域として含む Grice のテキストを正確に理解するために、必須の条件であるが、それだけでは十分ではない。

② Grice の上記テキスト研究及び現代の言

語哲学の研究に関しては、研究代表者はこれまで、慶應大学（平成 22 年 4 月から日本大学）の飯田隆教授と連携をとってきた。この連携を継続するとともに、他の英米哲学研究者との共同研究等についても、必要に応じて実現する予定である。

③また、アリストテレス研究及び合理性と規範性の研究に関しては、研究代表者はこれまで Oxford 大学の David Charles 教授と連携をとってきた経緯がある。もともと、合理性に関する Grice の議論を研究代表者が知ることになったのは、同教授との意見交換からであった。同教授との研究協力に関する打ち合わせは、本研究開始時点において既に済んでいる。

(3) 基本的な文献は揃っている状況にあるが、図書に関しては、最近出版された図書を中心として若干の不備がある。また、雑誌論文に関しては、必ずしも十分な収集ができていないとは言えないので、これについては補う必要がある。

図書以外の設備備品に関しては、更新時期を過ぎたものが多く、整備された状況にあるとは言い難い。本研究の遂行上必要となる設備備品、特に周辺の機器類の充実を図り必要がある。

また、資料収集及び研究協力者との研究打合せを兼ねて、慶應大学（日本大学）と Oxford 大学をそれぞれ訪問する予定である。

(4) 最終22年度には、研究成果をとりまとめるために、学会等での口頭発表と雑誌等における論文発表を予定している（予定通り実施した）。なお、研究成果発表に関しては、20年度及び21年度にも、機会があれば雑誌等における論文発表等を積極的に行うことを考えている（これも予定通り実施した）。

研究代表者が主催する、Grice のテキストを読む前記研究会は、研究期間中も継続して開催するとともに、それ以後（23年度以降）も継続して開催していく予定である。最終的には（平成24年度内に）、関連する Grice の主要テキストをすべて翻訳して出版する予定である。

最終 22 年度に予定している、上記学会ないし研究会での口頭発表とは別に、研究期間終了後（23 年秋）、最終的な研究成果発表のために、依頼のあった西日本哲学会でのシンポジウム提題等を積極的に引き受けるつもりである。

#### 4. 研究成果

(1) 現代の価値論及び行為論に対して、Grice の合理性と価値に関する構成主義的な議論は、大きなインパクトを与え得るもので

ある。しかし、その主要部分を形成する彼の二つの講義録 (*The Conception of Value*, Oxford University Press, 1991; *Aspects of Reason*, Oxford University Press, 2001) は、極めて難解であるために、本邦ではまだ議論の対象となることがない。本研究の主要課題は、この二つの講義録を掘り下げて研究することにあり、研究成果の公表にはそれなりの意味がある。

しかし、Grice の議論は、アリストテレスとカントの形而上学的議論を踏まえた、正当なものであって、安易な理解を退けるものである。また、その議論を正しく理解するためには、現代の意味論と真理論に十分精通することも求められる。本研究の推進には、周到な準備が必要であった。

(2) 最初の2年間は、理性論、価値論に関する Grice の反自然主義的、構成主義的な考え方について、Grice 晩年の反デイヴィドソンの行為論を読み解くことを通して「総合的」に理解することを目指すと同時に、合理性と規範性に関する反自然主義的構成主義の考え方と、アリストテレス的な目的論を下敷きにする理性論の考え方の、関連性の詳細を明らかにすることを目指した。その成果は、Grice 晩年の講義録の拙訳「目的と幸福に関する考察」及び「目的と幸福に関する考察(後編)」に示した。

また、目的と価値、合理性と規範性をめぐる近年の議論の整理を進めると同時に、合理性と規範性をめぐる問題が、現代社会において具体的にどのような仕方で社会問題化しているかを明確にするために、企業によるメセナ活動の問題点を取り上げて論じた。

Grice 晩年の行為論に関しては、研究代表者が主催して7年以上に渡って継続している研究会において議論を積み重ねることができた。また、現代社会における合理性と規範性をめぐる問題に関しては、初年度に長崎大学の研究者グループと意見交換をする機会を得て、実りある議論を重ねることができた。更に、Oxford 大学の David Charles 教授とは、Grice の理性論及び行為論をめぐる議論に関する研究について、また、日本大学の飯田隆教授とは、広く意味論、真理論をめぐる議論に関する研究について、意見交換するとともに、研究成果の公表の仕方についても話し合った。

(3) 最終年度は、現代における行為論の主流をなす Donald Davidson の考え方に対して明確に批判的な Grice の行為論について理解を深めるとともに、Grice が主張する合理性と規範性に関する反自然主義的な構成主義と価値に関する実在論の両立可能性について、その詳細を明らかにすることを目指

した。また、合理性と規範性をめぐる近年の議論の整理を進めると同時に、合理性と規範性に反する意志の弱さというありふれた現象を、構成主義の立場からどのように説明できるかを明らかにすることを目指した。

研究成果のとりまとめに関しては、平成22年11月に福岡大学で開催された学会(西日本古代哲学会)において、「行為と出来事-P・グライスの戦略」と題する口頭発表を行うとともに、その後発表原稿に手を加えて、論文として公表した。また、「人間の生の目的と成熟の概念」と題する別の論文を、平成23年4月刊行の論文集『医療の本質と変容』に寄稿した。

また、研究代表者が主催してきたグライス研究会の成果を、本研究の成果と合わせて、Grice 晩年の講義録を翻訳出版するという形で公表することにした。出版社と契約した理性論・価値論・行為論の翻訳は、その大部分が既に完了している。平成24年秋までには刊行予定である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 岡部勉、行為と出来事-P・グライスの戦略一、文学部論叢 102、査読無、2011、79-97
- ② 岡部勉、目的と幸福に関する考察(後編)(翻訳)、文学部論叢 101、査読無、2010、137-148
- ③ 岡部勉、目的と幸福に関する考察(翻訳)、文学部論叢 100、査読無、2009、195-206

[学会発表] (計1件)

- ① 岡部勉、行為と出来事-P・グライスの戦略一、西日本古代哲学会、2010.11.3、福岡大学

[図書] (計2件)

- ① 岡部勉、他、九州大学出版会、医療の本質と変容、2011、269-85
- ② 岡部勉、他、水曜社、企業メセナの理論と実践、2010、82-106

[その他]

ホームページ等

<http://www.let.kumamoto-u.ac.jp/com/com/okabe/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

岡部 勉 (OKABE TSUTOMU)

熊本大学・文学部・教授

研究者番号：50117339